

GF

ジェンダーフォーラム
通信

GENDER FORUM PRESS

和光大学 ジェンダーフォーラム 〒195-8585 東京都町田市金井ヶ丘5丁目1番1号 和光大学ジェンダーフリースペース(G112) TEL 044-989-7777 内線4112 gen-free@wako.ac.jp

GF EVENT

講演会「子宮頸がん予防に大切なこと」を通して考えたこと

2023年11月1日(水)に本学で開催された標記の講演会(講師:町田市民病院副院長の長尾充氏)に、人間科学科の専門科目であり、同時に教職科目にもなっている「健康教育学」が協力するという形で、学生に聴講してもらいました。当初のシラバスには「からだを守る仕組み」として、「免疫」の学習が含まれており、ねらいとしても内容としても、「子宮頸がん」をひとつの教材として取り上げる十分な価値があると判断しました。また、後述するように女性特有のガンである「子宮頸がん」は、ジェンダー問題についても示唆を与えてくれると判断しました。

しかし、この講演会を開催するにあたり二つの準備が必要でした。一つは、ワクチンの意味を理解するために、事前に「免疫」の仕組みを理解しておく必要があるということです。人体の中で「免疫」がどのような仕組みで働いているのかを知る必要があり、そのための教材づくりが必要でした。そこで事前学習の中で取り上げたのは、「ゴルゴ13 シリーズ」の第114巻に掲載されている「病原体・レベル4」でした。これはいわゆる「エボラ出血熱」を題材にしたもので、「免疫」のあるサルから抗体を取り出すことで世界の人々を救うという筋書きでした。学生たちは熱心にこの推移を注視するとともに、その意味内容を理解しようとしていたのが印象的でした。

それでも「抗体」が形成される仕組みは複雑で未知な部分が多いことで、より丁寧な解説を加えないと理解されないという難点がありました。

二つ目は、以下の学生のように、啓発活動の不足からくる「まなざし」の問題です。

「私たち男性には関係ないように思えてしまうが、自分たちのパートナーの命に関わる重要な話であると感じた。

どういった症状が出るのか、なぜ感染するのか、どのような検査・ワクチンがあるのか、知っておくだけでもパートナーの命を救うきっかけになると思った。また、今日の講演会は中学から高校でも行っていくべきだと思った。」

つまり、この講演のような話を聞かない大半の男性たちは、問題を他人事、つまり女性個人に関わる問題と捉えている可能性が極めて高いということです。これは単なる啓発活動の不足ではなく、そもそも人間のからだに対する意識の薄さ、無関心さに起因しているように思います。これは大学の問題というよりも、義務教育段階からの「からだの学習」が丁寧に行われていないことが原因です。それが異性のからだへの無関心、ひいては自分のからだそのものへの無関心につながっているように思われます。ちなみにある調査によると、上腕骨と大腿骨が二本あると思っている学生や、皮膚の直下に鎧のように骨格があると考えている学生もいたということです。これは「対岸の火事」ではありません。



▲講師の長尾先生

その意味で本講演は、単なる啓発活動の域を超えた問題を提起していたと思います。自他の「からだ」への無関心は、命への無関心であり、それは同時にあらゆる偏見や差別の温床となります。他者のからだへのまなざしは、自分に対する他者のまなざしとなって跳ね返ってくることを考えると、今回のように「免疫」をはじめとする生きているからだの正確な理解は、人間尊重や人権理解の礎になるといえます。

先の学生の感想から考えると、ことはパートナーに関わる問題に矮小化してはいけません。 「マザー・キラー」と呼ばれるこの疾病は、社会的損失の極めて大きい問題であると同時に、性別を超えた人間の命とからだの根幹を問う一つの窓と考えられます。よい機会を提供していただきました。

(制野俊弘・人間科学科)



▲受講した学生たちの様子

GF EVENT

キャリア支援室・ジェンダーフォーラム共催 「LGBTQ+とそうかもしれない学生のための 就活・就労」セミナー

2023年11月28日(火)に、「LGBTQ+とそうかもしれない学生のための就活・就労」セミナーをオンラインで行いました。この企画の発端となったのは、2023年8月に開催した事務局教育支援部の研修「多様な性と私たち」です。研修では、NPO法人から講師をお招きし、グループワークを通じてLGBTQやその理解者・支援者であるアライについて学びました。その後、「セクシュアリティの悩みが原因で、就活に不安を感じたり、困っている学生はいないだろうか？何か力になれることはないだろうか？」と、キャリア



▲ちらし(抜粋)

支援室で今回の企画が立ち上がり、ジェンダーフォーラム共催という形で開催する運びとなりました。

セミナー当日は、当事者でもあり現在はLGBT支援者として働いている卒業生を講師として迎え、体験談を交えながら「就活」や「就労」についてお話しいただきました。第1部では、「就活基本講座」として、キャリア支援室職員から就活スケジュールや身だしなみなど、基本事項の説明を行いました。カミングアウトは必須ではないことやセクシュアリティのスタンスを決めて就活を進めることが大切であるという点は、これから就活をスタートさせる学生にとって安心材料になったのではないかと思います。

第2部は、「卒業生のリアルな体験談を聞こう!」ということで、実際の体験談をお話しいただきました。キャリア支援室職員との一問一答形式も取り入れ、盛りだくさんの内容にお答えいただきました。なかでも、セクシュアリティのスタンスや企業選びの基準、面接時のエピソードなどのお話には参加した学生も聞き入っていたように思います。自分がどのような働き方をしたいか徹底的に考え、綿密な業界研究を行った卒業生の姿勢は、職員としても感慨深いものでした。

講師が卒業生ということもあって、終始アットホームな雰囲気です。セミナーは進み、最後に和光生へのアドバイスや参考文献のご紹介があり、質疑応答の後、終了となりました。

今後も、セクシュアリティに関わらず学生の悩みや不安に寄り添った企画を実施できればと考えています。また、在学生で就活や就労について相談したいという方は、是非お気軽にキャリア支援室(A棟3階)までお越しください。

(職員・キャリア支援室/企画室)

※2024年4月、キャリア支援室は「キャリア支援課」に、企画室は「企画課」に、名称を変更します。

GF EVENT

2023年度デートDV防止啓発講座

2023年11月16日(木)、今年度もデートDV防止啓発講座が開催されました。講師にはNPO法人レジリエンスの西山さつき先生をお招きし、徳永貴志先生の共通教養科目「法と人権」の授業の中で開催されました。ここ数年は、町田市男女平等推進センターが主催し、ジェンダーフォーラムは共催というかたちをとっています。

先生のお話によれば、デートDVは、他人事だと思わないことが大切です。ここでは、被害者から相談を受けた場合を想定して考えてみました。被害を受けている人は、友達に相談するケースが多く、だからこそ当事者以外にとっても身近な問題であり、ここにこの講座を開催する意義があると感じました。被害を受けていても、被害者がなかなか加害者である交際相手と別れることができないトラウマティックボンディングという構造があるために、問題解決までに交際相手とよりを戻す回数は平均して5~8回のことです。被害を受けている友達からの相談に対し「別れた方がいいよ。別れなよ」という助言をしがちですが、残念ながらそれはあまり有効ではないことがわかります。なかなか別れられない被害者(友達)にいら立つこともあるでしょう。トラウマティックボンディングがある以上、このように問題を自分たちだけで解決しようとするのは危険です。友達の話に耳を傾け、「あなたは悪くない」と繰り返し伝え、友達と一緒に信頼できる大人に相談することが大切です。自分たちだけで何とかしようとせず、専門の相談機関につながっていくことが解決への糸口になると思います。相談することにより、トラウマの反応が減っていったり、冷静な判断ができるような脳のはたらきになっていったりという効果があるようです。学生のうちにカウンセリングやセラピー(和光大学にも学生相談センターがあります)を体験しておくこともおすすめとのこと。「相談する勇気をぜひ持ってほしい」は先生からのメッセージです。

講座を受講した学生たちから、授業後にコメントペーパーや無記名のアンケートが寄せられました。

(西川春菜・ジェンダーフォーラムスタッフ)

<受講した学生のコメントを紹介します>

今回の講義を受け、一番印象に残った内容は、「ありがとう」「ごめんなさい」「助けてください」という3つの言葉を大切にすることです。

感謝する視点を変えること(人間は誰だって間違ってしまうため、その間違いを認めて「今気が付けてよかった」というように改善しようと考えを変えること)も印象に残っています。そして、「助けて」を言ってもいいんだよという言葉がとても支えになるものだと思います。困ったときに「助けて」と誰かに言うのはとても勇気のいることだと思います。その「助けて」のSOSを、安心して発信できる環境をもっと作っていきべきだと思います。

公民館などに行くと、トイレにデートDVなどに関する情報があったり、相談窓口への案内などが行われていて、積極的に活動されているのが目に見えて実感できました。

恋人にDVをされたら相談する場所があるんだという認識を持っているべきだと思ったので、今回の講義はとても良いものになりました。

DVは愛情ではないんだなと思いました。相手と別れた後のケアや周りの対応、自分だけでもしくは友達間で解決しようと思わないことを覚えておきたいと思いました。また、DVに関する正しい知識をつけることも重要なんだと実感しました。決して後回しにせず、今解決しようとする、今取り組むことが大切なんだと思いました。

(学生・心理教育学科)



▲講師の西山先生

人は、いろんなことに対して独占をしたがったり支配したがる生き物だと思う。その気持ちが大きすぎて、暴言や暴力などに変わってしまうこともあるのだと感じた。暴言や暴力は何があってもしてはいけないこと、そういった気持ちが出てしまったとしても心の中で抑えたり、他のことで気持ちを晴らしたりすることが大切だと思った。人間は

人と人が支え合って生きていく生き物で、何事も1人ではできない。恋愛も同じで、人がいるから成り立つことである。だから、自分勝手なことや自己中心的に動いていたら上手くいかない。相手の考えや行動を尊重し、尊敬し合うことが大切だと思う。尊重が出来なかったり、相手の気持ちを理解しようとしなかったり、自分の意思が強すぎると、DVが起きてしまうのかなと思った。テレビ等で見ることもあるが、DVをされていても人に言えなかったり相談できない人が多くいる。相談出来ないということは余程怖い思いをしていたり、相談したらまたなにかされるという恐怖感に囚われているのだと思う。人間は支え合う生き物なので、常日頃色々な人とコミュニケーションを取り合い、その人に変化が見られたり様子がおかしいと思ったらすぐ気づけるように、これからは私は人と接し続けることが大切だと思った。

(学生・人間科学科)

GF EVENT

2023年度GF卒論・卒制発表会



▲対面とZoomによりハイブリッド開催された発表会

今年度の卒業論文・卒業制作発表会は、2024年1月17日(水)、GFSにおいて対面で、またZoomミーティングによるリモート参加も併せて開催されました。発表者とタイトルは以下のとおりです。平野さん(現代社会学科)『児童養護施設における性的マイノリティの子ども支援の実態に関する考察』(卒業論文・主査:杉浦郁子先生)、林さん(芸術学科)『Macaron』(映像作品・絵画作品・主査:梶田ちひろ先生・副査:小林茂先生)、Sさん(総合文化学科)『言えなかった』(映像作品・主査:小林茂先生)。

平野さんの卒業論文は、児童養護施設において、性的マイノリティの子どもたちがどのような苦悩を抱えて暮らしているのか、そしてその悩みに対してどのような

支援ができるのか、ジェンダーやセクシュアリティに関する先行研究を幅広く細読したうえで、議論を展開するものでした。児童養護施設という空間に馴染みのない参加者も多いことが見込まれたため、コメンテーターとして社会福祉法人旭児童ホームの理事で、目白大学で教鞭もとる飯塚成亨氏に参加していただきました。卒業論文の結論は、大人から虐待を受け、施設でも偏見や差別を受けるという二重の受傷体験に対して、施設職員の意識の変革を求めるという政策提言を含むものでした。

飯塚氏からは、社会的養護といった場合、里親制度が中心となる米国における調査の結果と、施設養護が主体である日本の状況は簡単に比較できないといった指摘があり、さらに、児童養護の領域で卒業後に仕事をするという平野さんに対し、いわずもがなではあると断りつつ、児童養護施設における仕事がとても大変だというアドバイスがありました。平野さんは、同じ分野の先達からの助言を受け、みずからの進路をまっとうしていく決意を新たにしたいものと思います。



▲発表する平野さん

林さんの卒業制作は、旧知のミュージシャンがボーカルを務めるバンド・プロボタルトの『Macaron』という楽曲のミュージックビデオとそのミュージシャンを描いた絵画作品です。他者表現として、映像・絵画という二通りの表現形式を採用しつつ、いずれも、色遣いに細心の注意を払い、そして大胆に、バンドのパフォーマンスの躍動感を背景として、彼女らしさを表現し、その表現のなかに彼女の葛藤が表されているものでした。色彩については、緑(赤)と青(黄)という対比が効果的に使われています。



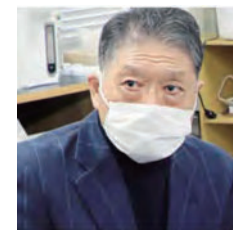
▲林利緒奈『Macaron』



▲発表する林さん

参加者からは、ミュージックビデオについて、往年のJUDY AND MARYのプロモーションビデオを見ているような華やかさ・賑やかさがあるといった感想が述べられました。林さんによれば、学科の先生から、作品に「JUDY AND MARYっぽさ」があると評されたとのこと。プロボタルトには、JUDY AND MARYが好きだといっているメンバーもいるそうです。作品をめぐるいろいろな話が聞けることも発表会ならではのようです。

絵画作品は、映像作品とコンセプトがリンクしており、映像作品でサブカラーとして使用した赤と黄をメインカラーとすることで、表現が対置されています。迫力のある号数の大きな大作だと聞いていたのですが、GFSで実物を見ることができなかったことは残念でしたが、写真からも、モデルとなったボーカリストの眼差しの力強さがひとと伝わってきました。



▲講評して下さった小林先生

Sさんの卒業制作は、兄から性暴力を受けてきた主人公「あすか」が、小学生の頃からの記憶をたどり、これまでの人生を語るフィクション作品です。終止、淡然として、心寂しく、それでいて体験を語りやめない強い意思が見え隠れするナレーションに、日常や心象の風景の映像が組み合わせられたものでした。

作品の語りはストーリーとして完成していましたが、映像には、未完成なところがあり、その部分では黒い画面が続きます。ゼミナールでは、この黒味が深痛を何よりも表しているとの評もあったと聞きました。作品として、半完成の状態であったからこそ、鑑賞者自身が看取るメッセージに深みが生まれたのかと思います。

主査の小林茂先生からは、Sさんがこのテーマを選び、制作を始めるまでのゼミナールでの取り組みなどのご説明がありました。ゼミナールにおける制作活動を経て、孤独を語り紡ぐものとして作られたこの作品ですが、発表会の参加者が涙たしなむ場面を目の当たりにして、だからこそ、性暴力被害者がけっして孑然たらぬことを柔軟と述べるものになっているのだと感じました。

今回の発表会は、久しぶりの対面実施であり、Zoomミーティングも併用したため、数多くの参加がありました。発表者の卒業論文・卒業制作は、これから、GFSで閲覧・視聴できるように準備します。来年度も、皆さんの発表をお待ちしています。

(杉本昌昭・ジェンダーフォーラム担当者代表/経営学科)
※発表者名は、一部仮名としています。

EVENT REPORT & BOOK REVIEW

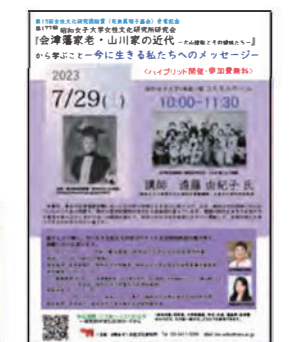
揺るぎない志操を持って、眼界を広く持て 昭和女子大学女性文化研究所研究会参加報告及び 『会津藩家老・山川家の近代—大山捨松とその姉妹たち—』書評 雄山閣、2022年、定価2,800円(税別)

2023年7月29日(土)、第177回昭和女子大学女性文化研究所研究会「『会津藩家老・山川家の近代—大山捨松とその姉妹たち—』から学ぶこと—今に生きる私たちへのメッセージ」に参加しました。研究会に加え、受賞した『会津藩家老・山川家の近代—大山捨松とその姉妹たち—』を読み、ここに報告をまとめます。

研究会は、第15回女性文化研究奨励賞(坂東眞理子基金)受賞記念として行われ、受賞者である遠藤由紀子先生(昭和女子大学歴史文化学科非常勤講師・女性文化研究所研究員)の研究報告と質疑応答が行われました。研究会について『昭和女子大学女性文化研究所Newsletter No.80』に遠藤先生による詳細な報告があります。昭和女子大学のウェブページからダウンロードできますし、プリントアウトしたものがジェンダーフリースペースにも置いてあります。ご興味のある方はスタッフまでお声がけください。



▲遠藤由紀子『会津藩家老・山川家の近代—大山捨松とその姉妹たち—』



▲昭和女子大学女性文化研究所研究会ちらし

「セクシュアリティ・ジェンダー・テキスト」授業内 自著を語る—川本直氏講演 『ジュリアン・バトラーの真実の生涯』



▲3限の講演の様子

＜2023年1月19日（金）実施＞

川本直氏はデビュー作『ジュリアン・バトラーの真実の生涯』（河出書房新社、2021年）により第73回読売文学賞小説賞を受賞され、現在俄然注目を浴びている気鋭の作家・批評家です。虚構とリアルの境界を自由奔放に往来する荒唐無稽なフィクションリティをしかけたこの作品は、刊行されるやセンセーションを巻き起こし、メディアでも絶賛されました。この作品は筆者が専門とするイギリスの作家オスカー・ワイルドに由来するトリックが仕組まれております。ワイルドを深く読み込むことから生まれた衝撃的な傑作を、ワイルドから解きほぐし、批評的読解が小説という作品に結実されるからくりの一端を川本先生に語っていただきました。また、参加者から、和光の卒業生である漫画家、中村明日美子さんの『Jのすべて』の影響が『ジュリアン・バトラー』に見られると思うと指摘されると、川本先生は「見抜かれたか」と舌を巻かれ、それを機に刺激的な議論が交わされました。ほかにも同性愛の、小説や漫画表現における可能性、さらに川本先生ご自身の女装の変遷と経験に至るまで、自在なトークで存分に語っていただきました。

▲川本直『ジュリアン・バトラーの真実の生涯』
河出書房新社、2021年、定価2,250円（税別）

鹿鳴館の貴婦人と謳われ、女子英学塾（現・津田塾大学）の発足に関わった大山捨松の知名度が際立つのですが、彼女には他に兄弟姉妹がいました。彼女をあわせて7人の兄弟姉妹の内、4人が海外遊学・海外留学の経験を持ちます。遠藤先生の研究報告での山川家の子女への言及は、長女・二葉、長男・浩、三女・操、次男・健次郎、五女・捨松、についてなされました。例えば、山川家の人々の、自宅に書生を住まわせて援助したり、自分自身が大学総長や教諭として教育者として尽力したりといった功績についてです。しかし、本書の骨子の一部である研究論文では表立っては知られていない次女・ミワの人生に着目しています。選考報告によれば、本書の受賞理由にも、次女・ミワ、四女・常盤について「殆ど世に知られていない二人も同等に取り上げ、その生き方を丁寧に明らかにしている。」と評価されています。

実社会で目に見えるわかりやすい立場を築いていった人については、公的な記録も多く調べやすいですし、経歴が輝かしい人にどうしても注目がちです。遠藤先生は、山川家の子女を同等に扱うために、表立った活動が少なく記録の少ない次女・ミワや四女・常盤についても、足を使って聞き取り調査をし、地元の図書館に通って地域資料を調べるなど粘り強く調査されたことがわかります。遠藤先生は報告のなかで、現地へ行くことの大切さを訴えておられました。図書館へ行けば地域資料があるし、もし目に見えた成果が得られなくても、地元へ足を運んで、山川家の人々に思いを馳せるという経験が財産になるのです。

「什の掟」にある「ならぬことはならぬ」という揺るぎない志操に基づいた教育方針で山川家の7人の兄弟姉妹を育てた母・艶がいました。また山川家の次男・健次郎の言葉に「眼界を広く持て」という言葉があります。「揺るぎない志操を持て、眼界を広く持て」は、そうした生き方を体現した山川家の子女たちからの、今に生きる私たちへのメッセージだと感じました。私には、地道に足を動かして、目立つ人物だけに注目せず、歴史の中に埋もれていた人物にも光を当てた、遠藤先生の研究姿勢そのものが、「揺るぎない志操を持て、眼界を広く持て」を表していると感じられました。

（西川春菜・ジェンダーフォーラムスタッフ）

＜参加した学生の感想を紹介します＞

川本先生の講演は先生がざっくばらんに語って下さったので全体を通してとても自由な雰囲気と和気藹々としていた。作家・編集者の裏話や著作の『ジュリアン・バトラーの真実の生涯』の創作秘話も惜しげもなく話していただき、大変興味深く伺った。著作にて同性愛にまつわるテーマを多く扱っていたため、学生からは同テーマで書かれた作品についての質問が出たり、今出版社が行っているキャンペーンにある声優が起用されているが、その起用に至った経緯なども語って下さり、普段聞けないゴシップも交えた内輪話に興味津々だった。

そんななかで川本先生は我々に見姿の変遷を語るために女装したご自身の写真と公演中の様子の写真を並べて見せてくれた。自分は女装についてコスプレのように外見を女性に似せる行為だと考えていたが、先生の女装した写真には、先生が持つ美しさへの探求心があったように見えた。女装する男性にとっての女装とは、自らの外見をどれだけ女性に似せられるかではなく、自身の内面にある美意識を外側に滲み出させる行為で、いわば美の探求であり、魂の造形なのだった。

（学生・総合文化学科）



▲4限はジェンダーフリースペースで懇談会を行いました

試験期間中の開催となったため出席者が少なかったのですが、その分非常に打ち解けた雰囲気の中、自由にトークを楽しむ双方向的な講演会となりました。女装時代の先生の可憐な姿には一同思わず歓声を上げました。そこからの変わりように驚愕しつつも、人間の内面に本質を求める人間観を否定し、セクシュアリティを脱ぎ着のできるコートのように捉えていたオスカー・ワイルドのジェンダー哲学を実践する、ワイルドの使徒としての川本直の姿を見る思いがしました。

（宮崎かすみ・総合文化学科）

ジェンダー・スタディーズ・プログラム紹介

＜ジェンダー・スタディーズ・プログラムとは＞

このプログラムは、和光大学のすべての学生に開かれており、教職課程のように別途単位修得しなくても、ジェンダー関連科目を系統的に単位修得（20単位以上）し、卒業年にレポートを提出することで修了となります。ジェンダー関連の科目を履修している・履修しようと思っている学生は、是非申請してください！

卒業年に所定のレポート等を提出し修了が認められると、卒業時に「ジェンダー・スタディーズ・プログラム履修証明書」を発行します。この証明書は、教員免許や司書などとは異なり、直接就職につながる国家資格ではありませんが、ジェンダー関連の知識を身につけた証となり、就職活動や社会生活に活かすことができます。

＜プログラム修了までに必要なこと＞

STEP1 [1～4年次の4月]

プログラム履修申請 ※何年次でも申請できます！
毎年4月にプログラム履修説明会を開催し、申請を受け付けています。説明会に出席せずに申請することもできますが、初めて申請する学生は是非説明会にご参加ください。

STEP2 [履修申請後毎年]

「プログラム履修状況表」の提出
一度申請した学生は、原則毎年、STEP1の申請受付期間中に「プログラム履修状況表」を提出することが必要です。毎年、提出することでジェンダー関連科目の履修状況を振りかえり、プログラム修了に向けての見通しを立てることができます。

STEP3 [卒業年次]

レポート等の提出
3月に卒業する場合は1月頃、9月に卒業する場合は6月頃に、所定のレポート（レポートⅠ、レポートⅡ）および「プログラム履修状況表」を提出してください。
*科目群Ⅰ・Ⅱ、その他プログラムの詳細は、学内で配布している「ジェンダー・スタディーズ・プログラム」リーフレットや、『学修の手びき』でご確認ください。

2023年度から2024年度へ

<修了者数と論文タイトル>

2022年度、2023年度のジェンダー・スタディーズ・プログラム修了者数と、レポートIとして提出されたレポートのタイトルを一部ご紹介します。

2023年度 5名修了

- ・「児童養護施設における性的マイノリティの子ども支援の実態に関する考察」
- ・「性の対立と問題の所在」
- ・「『かつこいい』と『かわいい』に付随するイメージ—特になろう系においての男女の比較—」
- ・「『プリキュア』からみる育児の強制」
- ・「ジェンダーの視点から見る女性アイドル」

2022年度 11名修了

- ・「女性プレイヤーのコンピューターゲームプレイ継続とキャラクター描写—ゲームによるジェンダー再生産に注目して—」
- ・「BL（ボーイズラブ）作品における祖母・老女の表象—カミングアウトを中心に—」
- ・「男女共同参画センター すくらむ 21」でのインターンシップ参加報告 ～ジェンダー関連の学習・活動記録～
- ・「少年漫画にみられる女性描写」
- ・「ジェンダー秩序という『隠れたカリキュラム』～日本の学校における教師文化と教育実践～」

2023年1月から、ジェンダーフォーラムスタッフをしている西川春菜です。基本的に前期・後期の授業期間中の11:30～16:30（13:00～14:00はお昼休み）にジェンダーフリースペースを開けています。着任一年目の今年は、試行錯誤の日々でした。コロナ禍などにより、安定して開室することができなかった期間を経ているためか、来室は比較的少なめでした。第一歩として、決まった時間に開室し「ジェンダーフリースペースは開いているのだな」と周知することが大切だと思い活動してきました。ポスターを作成し、学内に掲示しました。せっかく来室したのに、理由もわからず閉室していた、という「空振り」は極力なくしたいと思い、短い間でも席を外す際や、打ち合わせ等で閉室する際の案内表示を作成し、ドアに掲示しました。

来室対応以外の時間は、過去の業務日誌を確認したり、関連団体のリーフレット・機関紙、GF通信の在庫を整理、ファイリング、ジェンダー関連書籍の書評ちらしの作成などをしながら、業務をする中でジェンダーフリースペースの活動の意義について知ることができました。

来室は徐々に回復してきている印象です。重要なのは、来室人数の多さではないと私は考えています。来室者ひとりひとりが、ジェンダーフリースペースに集うことにより、自身の研究テーマを深めたり、お話しや交流をして心が豊かになったり、読書をして内省したり、何かしら得るものがある「場」であることが、ジェンダーフリースペースの意義であると考えています。2024年度も引き続き、来室者にとって、必要な資料が見つかったり、心が安らぐ場であったりなど、「来て良かった」と思ってもらえる場であるよう、ジェンダーフリースペースを整えて来室者を迎えたいと思っています。

(西川春菜・ジェンダーフォーラムスタッフ)



▲ジェンダー・スタディーズ・プログラム履修証明書（見本/表・裏）



▲ジェンダーフリースペースのポスター